

# もっと知ろう “陶”

## 18、常夜灯

仏前の燈明台から派生した石灯籠は、江戸時代には神社境内に「境内灯籠」として奉納されるようになり、更に境内灯籠より大型の「辻灯籠」が村内の辻、神社への辻にも造られるようになり「常夜灯」と呼ばれるようになりました。常夜灯は火防・村内安穩を願って秋葉山信仰と結びついて「秋葉辻灯籠」とも呼ばれています。

江戸時代の文化・文政の頃には台石を高く積んだり、笠の反りを大きくしたりして壮大な感じを表現し、実用面ばかりでなく村の象徴として優美な常夜灯が造られるようになりました。陶の常夜灯もこの頃に造られています。

近年、火が灯されることはなくなった常夜灯はその役目を終え、信仰からも象徴からも離れて、ただの石積みとなってしまった感がありますが、日本独特の優美な曲線と風情を持つ常夜灯を石積みで終わらせるのはもったいない気がします。10月には猿爪・水上・大川の各神社で秋祭りが開催されます。参詣の際、今一度しげしげと眺めてみてはいかがでしょうか。



猿爪の常夜灯が記された古地図  
その後、天神社に移されました。



猿爪天神社の常夜灯  
文化7庚年（1811年）  
全高 359



水上市場平の常夜灯  
文政4辛巳年（1821年）  
全高 275



八王子神社下の常夜灯  
文化3季丙寅（1806年）  
全高 326